

垢田小学校校内研修の取組について

1 研修主題について

自分をみつめ、自らの手で未来^{あす}を切り拓く子供の育成

(1) 「自分をみつめる」とは

本校では、「自分をみつめる」とは、自分のことや学級、学校の課題を自分事として考えることとする。自分事とは、責任と自覚をもち、自身ができることを積極的に取り組んで課題解決を行うこと、つまり、何事も他人任せにせず主体的に取り組むことと考える。どんなことでも自分事として捉えられる児童は、常にその目的が何であるかを意識できている。集団の中で、「それをやることで何が解決できるのか」「もっと改善できるやり方はないか」ということを常に念頭に置きながら物事に取り組むことで個が成長し、さらにその成長が集団の成長へつながると考える。

(2) 「未来（あす）を切り拓く」とは

本校では、「未来を切り拓く」とは、自分や学級、学校の将来を見据え、よりよい集団決定（合意形成）をしたり、意思決定をしたりすることとする。学級活動を中心に、自分の意思決定や集団での合意形成を体験しながら、自分らしい生き方を考えさせていきたい。



やまぐち総合教育支援センター相田崇晴先生による年度初めの研修

2 研究の内容

・ 理論研究

指導者による講演、年間指導計画の見直し、アンケートの実施と分析

・ 授業研究

「合意形成の仕方」の作成、教科等との関連、キャリアパスポートの活用、公開授業

・ 学習環境研究

学級会グッズの見直し・作成、掲示計画の見直し・作成

・ 児童会活動研究

活動方法・内容の見直し、掲示板の活用



福岡教育大学脇田哲郎教授による指導講話

3 成果と課題

昨年度は、研究の入り口として授業づくりを中心に研究を進めてきた。しかし、授業の下支えになるものは学級経営の充実であり、そのためには日常の指導や教科等との関わりを考えた指導が必要であるという当たり前のことに目が向いていなかった。そこで、今年度は、学活の授業を点としてとらえるのではなく、線でとらえていきたいと考えた。具体的には、学年と学年をつなげていく、小学校と中学校と連携していくなど「縦のつながり」を意識した指導、また、特別活動と各教科との往還関係について考えた「横のつながり」を意識した指導を行った。

11月には、プレ大会を行い4学級の授業公開を行った。1年生は、学級活動(2)で友達同士の言葉の使い方について考える題材「ふわふわことばをつかおう」を、4年生は、学級活動(1)で学級目標に近づくための集会について話し合う議題「スポーツの秋!4年1組スポーツ大会をしよう」を、5年生は、学級活動(1)で、6年生とのつながりについて話し合う議題「6年生に『お弁当の日』のお礼をみんなでしよう」を、6年生は、学級活動(3)で、中学校を見据え、自分のレベルアップについて考える題材「中学校へ自主学習をつなげよう」を行った。以下、プレ大会の成果と課題について述べたい。

○ 学習規律や学びに向かう姿勢について

教科同様に学級活動の授業においても、授業規律や子供たちが学びに向かう姿勢は日々の積み重ねが現れる。参観者のアンケートからは「児童同士が認め合える雰囲気や、児童と教員の信頼関係が構築できていた」との言葉があった。学級活動を中心とした日頃の学級経営の積み重ねの大切さを改め感じた。



1年1組 学級活動(2)
「ふわふわことばをつかおう」

○ 話し合い方について



4年1組 学級活動(1)
「スポーツの秋!4年1組スポーツ大会をしよう」

4年生と5年生で学級会の授業を行った。どちらのクラスも、司会グループが、しっかりと話し合いの進め方を計画・準備し、スムーズに話し合いが進められた。しかし、形式通りの話し合いであり、健全な葛藤のある話し合いの展開はなかった。愛媛大学の白松先生からは、多様性が認められる話し合いにするには、感情的な言葉がもっと出るとよいとの指摘を受けた。「自分達のクラスをもっとよくするためにポジティブなことをする時には、相手を否定することもある。人格を否定することはだめだが、反対の意見を言えることも大事だ。情感が共感になる。みんなはどう思うか分からないけれど、『自分はこうってみよう』と言える雰囲気があるといい。」との言葉を受け、より本音が出せる話し合いになるような指導の仕方を模索していきたい。

○ 時間配分について

学級活動(2)や(3)では、「つかむ」段階や「さぐる」段階で、時間をかけすぎると「見つける」「きめる」段階での話し合いや意志決定の時間が足りなくなる。しかし導入を急ぎすぎると、課題を自分事として捉えることができないまま授業が進み、自分の学びを深めることができない。



5年2組 学級活動(1)
「6年生に『お弁当の日』のお礼をみんなでしよう」

1年生の授業では、アンケート結果や資料などを電子黒板で示し、視覚的に捉えやすくすることで、課題を自分の事として考えることができた。しかし、提示する資料の数が多すぎて、「見つける」段階でのロールプレイにかかる時間や意志決定の時間が足りなくなってしまった。また、6年生の授業では、導入を急ぎすぎで、友達と自分の自学ノートを比較する時間をとらなかったが、その時間をとれば、児童がより自分事として課題を捉えること

ができたのではないかという反省があった。

解決に向けての話合いの時間や意思決定の時間を確保するために、より効率的で効果的な導入の手立てを考えていきたい。

○ 小中の往還について

6年生の授業では、中学生生活を見据え、自主学習のレベルアップを図ろうというねらいのもと、授業を展開した。「見つける」の段階で、中学生から自主学習についてのアドバイス動画を見たり、中学校の教師からの話を聞いたりして、自分の自主学習と中学生のものとの違いを考えていった。白松先生からは「中学生からのコメントを授業に取り入れるという実践はあるようでない。同学年同士では同じ経験上からの助言しかできないので、少し上の学年の人と自分とを比べるということは、意図的に経験をつくるという意味で非常に有効な支援である。」とのお言葉をいただいた。実際に、中学生や中学校の教師からのコメントから、自分たちが考えていなかったことを発見した児童も多く、自分の自主学習をレベルアップさせる新たな視点に加えていた。

一方、参観者からは「中学校の生徒や先生が関わることは、どちらか一方にとってのメリットでなく、双方の学びにつなげる余地があったのでは」との意見があった。小学校・中学校、双方の学びにつなげるためには、今回の授業でいえば、中学生に小学生のノートを見せ、小学校で学んだことを中学生生活に生かしていくという視点を与えることで、双方の学びにつながるようにしてもよかった。また、今回の授業を受けた小学生の自主学習の変容を中学生に伝えるといったことも考えられる。

多様な他者とのつながりを大切にするためには、与えられるだけではなく学びの往還を考えていきたい。



6年1組 学級活動(3)
「中学校へ自主学習をつなげよう」

4 来年度に向けて

今年度の反省を受けて、来年度のキーワードを「つながり」として研修を進めていきたい。具体的には以下の3つのつながりについて実践していく。

① 教科等とのつながり

学級活動で育成を目指す資質・能力は、1回の活動で育成できるものではなく、課題の設定から振り返りまでの基本的な学習過程を繰り返す中で育まれていく。この学習過程での繰り返しの中で、各教科等で学んだ知識や技能などを、集団及び自己の問題の解決のために活用することが、各教科等で育成した資質・能力を、社会生活に生きて働く汎用的な力として育成することにつながると考えた。

② 異学年や幼稚園、保育園、中学校とのつながり

他者と対話したり交流したりする中で、自分以外の意見を聞き、自分の考えを広げたり、課題について多面的に考えたりすることができる。その範囲を学級だけにとどめず、異学年や保育園、幼稚園、中学校に広げることで、より多様な他者との交流ができる。その中で、自分のよさや頑張りに気づき自己肯定感や自己有用感を高めたり、キャリア形成に関わる意思決定や意欲付けにつなげたりできると考えた。

③ 地域や家庭とのつながり

子供たちが社会において自立して活躍するためには、学校と地域、家庭が連携することが必要である。学級活動（１）やクラブ活動、児童会活動等自発的、自治的な活動においては、地域の方の協力を得る活動が、学級活動（２）や（３）においては、社会参画の意識の醸成や地域や社会での自己実現を目指す活動が考えられる。また、特別活動の目標を地域と共有した教育活動を展開することも地域や家庭との連携を図るうえで重要であると考えた。